
もし外道なチートオリ主が物語りに介入したら.....ネギま!編

リベリオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もし外道なチートオリ主が物語りに介入したら……ネギま！編

【Nコード】

N5617Y

【作者名】

リベリオン

【あらすじ】

もしアニメや漫画の世界にチートオリ主が転生して縦横無尽に暴れまわったらとゆう妄想から生まれた作品です。現在は不定期更新です。 すごく重要……！

プロローグ（前書き）

この作品は作者の妄想から始まった作品です。あまりきたいはしな
いでください。

プロローグ

どうも初めまして、俺の名前は、いづくし巖島 あきひ晃 何処にでもいる17歳の高校生だ。

趣味はテレビ観賞（アニメのみです。） やゲーム（学校には行かずやりこんでいます。） そして読書（全て漫画のみです。） とゆう健全な学生だ。（世間では彼の事をニートや引きこもりと言います。）

そんな健全な学生（ちがいます。） である俺は今、17年間の人生で最大の出来事に見舞われていた。

俺はいつも道理にベッドに入って寝たはずだった。しかし、次に目を覚ましたら其処は白い空間だった。

例えるなら白い宇宙といったところだろうか…………… まあ宇宙がどんなのかは知らんのだが……………

まあいきなりこの白い世界にいた俺は誰かいないか探し始めたのだが…………… いや、特に問題があったわけでもなく人は簡単に見つかった。とりあえず俺は見つけた幼女に声をかける事にした。しかし……………

「申し訳ございませんでした」

といきなり土下座されて謝られたのだった。

いやあしかし…………… 見事なジャンピング土下座だったな…………… と、今は感心している場合じゃないな。

「えっと…君はここが何処だかわかる？あと何で俺がここにいるのかわかる？」

白いゴスロリを着て俺の前に土下座してビクビクしている幼女に俺は出来るだけ優しく問いかけた。

そうすると土下座している幼女は土下座をしたままの態勢で顔だけこっちに向けた。

「怒りませんか？絶対におこりませんか？」

幼女は涙目をウルウルさせて問いかけてくる。

そして俺はこう思った……………萌え……………と

ゲフン、ゲフン……………と、それはさておき……………

「怒らないから話してくれないかな」

「うう……………わかりました。……………えっと、個々は生と死のハザマの世界で、人間でゆうところの

三途の川と呼ばれている場所です。」

なるほど…個々は三途の川だったのか……………あれ？ちょっと待て、なんか可笑しいぞ。

「何で俺は個々にいるんだよ！普通三途の川って死んでからくる所だよ！俺死んでねーぞ！」

「ひっ！……あのですね…大変申し上げにくいのですが…貴方は既に死んでいます。」

「へ？…まじですか？何ですか！何で寝ただけで死んでるんすか！」

「えっと…すみません。原因は私なのです。」

「どーゆーこと？」

「あのですね、私は一応天界に住まう神の一人で名前をアテナと言います。それですね、最近残業が続いてまして…息抜きテレビで漫才を見ながらにオレンジジュースを飲んでいたので、私がオレンジジュースを口に含んだ瞬間…漫才が笑いのツボにはいつておもしろいきりオレンジジュースを噴出しまして…偶然近くにあった魂の書類を汚してしまいました…」

「それで俺が死んだと……」

「本当に申し訳ございませんでした　　「いや謝らなくていいよ…うん。全然怒ってないから……」　本当ですか！よかつた〜〜」

そう言っつて幼女ことアテナは土下座状態から立ち上がろうとする。

「ああ、言い忘れていたのですが、神のミスで死んだので貴方には……　つてなにしているのですか？！なんで指をポキポキって鳴らしているのですか！」

完全に土下座状態から立ち上がったアテナは俺の行動をみて驚き顔を恐怖にゆがめる

イ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、「3、2、1、
パーチ（指を鳴らした音です。）……………ハッ！私は一体何を……………」

おっ！戻った。どうやら俺が殴りかかる前までの記憶が無いらしい

……………

「それで？さっき何か言おうとしていたけど、何を言おうとしたの
？」

「ああ、そうでした！一番大事な事を言い忘れていました。えつと
…神様のミスで死んでしまいがちまだ寿命が残っている人は別の世界に
記憶を引き継いで転生する事になります。あとお詫びとして7回だ
け願いごとをかなえる事ができます。」

「ほ〜そうなのか…んじああさつさと転生しますか。」

「切り替えが早いんですね……………まあいいですけど。それじゃお願い事
を言ってください。たいていの事はかありませんから。」

なるほど……………いろいろチートを付けれるってゆうことが完璧だな。よ
し、まず最初は……………

「そうだな……………じゃあ1つ目は転生後にデットライジング2の主人
公みたいなガムテープでも作れるようにしてくれない？あと作
る時の物理法則無視とFate/Stay nightに出てくる
宝具級の物も作れるようにしてね。」

「無茶苦茶ですね……………まあいいですけど。ところでこの能力の名前、
どうします？」

「もちろん、『ガムテープの錬金術師』でよろ」

「はあー……はい設定しましたよ。次はどうします?」

「そうだな……次は、転生語にFate/stay nightに出してきた、『ゲート オブ バビロン』のようなのが欲しいな。とにかく何でも入って、1回でも中に入れたら取り出してもなくならない様にして欲しいんだけど」

「わかりました。ですが動物とか人間は入りませんよ。」

「OK、それでいいよ」

「……設定しました。名前は『ゲート オブ バビロン』でいいですね?」

「いや、『家庭の物置』と書いて『ゲート オブ バビロン』と読む」

「……次は何にします?」

「転生後に最強のA・Tフィールドをくれ。あと何枚もはれるようにしてほしいのところでもすぐにどんなときでもはれるようになるしく。」

「わかりました。名前は……『ドコデモA・Tフィールド』で。……わかりました。」

「次は……転生後の能力を上げてくれ。Fate/stay nightだったらオールEXオーバみたいなかんじで。」

「……………化け物ですね……………」

「そうか？まあどうでもいいが……………次は……………転生後の体は不老不死にしてくれ。外見年齢は15歳くらいで。」

「不老不利はちょっと……………不老だけならいけますけど……………」

「チツ……………まあそれでいいか……………」

「今、舌打ちしましたね！」

「えつと次は……………あれ？今思ったんだけどさ、何か火力が少ない気がする。」

「スルーですか！とゆうよりこれ以上能力を上げてどうするのですか！」

「そうだな……………よし、次は転生後にできるだけ小さくしたガンダムXについているサテライトキャノンを出せるようにしてくれ。あとバズーカみたいにして撃ちたいから反動と重さカットで。おまけにエネルギー消費無しでよろしく。あと名前は『ドコデモサテライトキャノン』でよろ。」

「私の意見はむしですか！まあいいですけど……………一応大きさはRPG-7ぐらいになります。」

「了解！あとは欲しい物は何も無いな……………あ！そうだ！転生する世界をネギま！の世界にしてくれる。あと原作開始の、そうだな……………いろいろやりたいから1000年ぐらい前にして。」

「わかりました。それじゃあ転生してもらいますね。本当にすみませんでした。」

「いや。もう気にしてないからいいよ。それより早く転生してくれないか？」

「わかりました。それじゃあいつてらっしやいです。」

そうアテナが言うと俺の足場がいきなり消えて俺は落ちていった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおお」

そして落ち始めてから数分後、俺はいきなり襲ってきた睡魔に勝てずに意識を手放した。

プロローグ（後書き）

次は一応主人公設定です。

主人公設定（前書き）

主人公設定です

主人公設定

キャラクター設定

【名前】 いつくしま 巖島 あきひ 晃

【性別】 男性

【身長・体重】 168cm 54kg

【筋力】 EXオーバー 【魔力】 EXオーバー

【耐久】 EXオーバー 【幸運】 D

【敏捷】 EXオーバー 【武器】 EXオーバー

スキル

『ガムテープの錬金術師』

いろいろな物をガムテープを使って組み合わせる別の何かを作ることが出来る能力。あらゆる物を作ることができる。時には物理法則を完全に無視したものでや宝具を作成が可能。

『家庭の物置』 (家庭の物置と書いてゲート オブ バビロンと読む)

能力は Fate / stay night に出てきた、『ゲート オブ バビロン』とほとんど一緒だが中には日常生活品とか食料そのほかにも古今東西あらゆるものが入っており、中から同じものを何回でも取り出す事ができるようになっており、いちいちもどさなくてもよくなっている。『ゲート オブ バビロン』のように中のものを飛ばすこと可能。

武器

『ドコデモ A・Tフィールド』

ランク AA〜EXオーバー

合計で23枚のA・Tフィールドを展開することができ一枚がAAランク以下の攻撃では破壊されない。またA・Tフィールドを重ねることにより強度があがりランク以下の攻撃では破壊されなくなる。応用として形を変えて剣や槍としても使用可能。発動範囲は半径25mならドコデモ発動可能。

『ドコデモサテライトキャノン』

ランク EXオーバー

ガンダム?に搭載されているサテライトキャノンやRPG-7ぐらいの大きさにしたもので、火力はオリジナルのサテライトキャノンと同じ。そして反動と重量は0に設定されている。あとマイクロウエーブが無くても発射可能になっている。

性格

やるときはやる男で性格は最終的に自分が満足していたらいい。とゆう感じで過程をあまり気にしない。

リベリオン」どうもはじめましてリベリオンです。」

晃「いっへん 敵島 あ 晃だ。」

リベリオン「さて……勢いではじめたのわいいが……」

晃「どうした？」

リベリオン「改めて見るとめちやくちゃだな。」

晃「まあそれは作者に文才が無いせいだろうな。」

リベリオン「まあそうなんですが……」

晃「で、なんでまたでてきたんだ？作者はでてこないんじゃないのか？」

リベリオン「いやあのねこれを見せるためにきたんだけど。」

晃「どれだ？」

リベリオン「これ」

> i 3 5 1 4 0 — 4 4 1 5 <

晃「ほう………でコイツは誰だ？」

リベリオン「君」

晃「なるほど俺か……俺だと！」

リベリオン「なにか不満かい？」

晃「いやとくにないが………」

リベリオン「だったら問題ない。とゆうわけで俺はかえります。ではサラバ。」

晃「な！ちよつとまてつてもういないのかよ！てなわけで作者が帰ったためおひらきだ。ではまたな」

主人公設定（後書き）

感想をお待ちしております。

第1話（前書き）

この作品は作者の妄想から始まった作品です。あまりきたいはしな
いでください。

そうだな……原作まで1000年はあるわけだしのんびりと世界一周でもしようかな……あ！でも一応、能力の確認でもするか……

とりあえずの目的が決まった俺はこの爆心地から離れるため移動を開始した。

数分後……

俺は爆心地から北に50kmほど離れた森におりたつた。しかし、空を飛ぶのつてすげー楽しいな、あれは癖になりそうだ。

さてと……まず『ガムテープの錬金術師』の能力を確かめるか……そうだな、適当にその辺に落ちている石と木の枝をつかってみるか。

俺は石と木の枝を拾って、ポケットからガムテープを取り出して（なぜ持っているかは、ご都合主義です。）石と木の枝を合わせてガムテープで巻いていく。そして、三週ぐらい巻くと石と木の枝をガムテープで巻いた物が光だした。光だした物は形を変化さしていく。そして、光がおさまった。

「うわ〜なんで光つたんだろ……やっぱり物理法則を無視してるからかな……まあ過程はどうでもいい結果さえ出せれば……」

そして俺は完成したものを確認した。

「なにこれ？どこにでもありそうな普通の剣じゃん……ってなんで石と木の枝から鉄製の剣ができるの！色々物理法則に喧嘩うってるよね！」

まあいいか……別に損しているわけじゃないし……さて……次の能力をためしてみるか……

「よし、こい『家庭の物置』（ゲート オブ バビロン）」

俺がそう唱えると俺の後ろの空間が歪み『家庭の物置』につながる。

「確かまだ何も入れてないから空っぽなのか……いや、『ドコモサテライトキャノン』が入っているのか……まあこれは後で確かめるとして……まず何か適当に入れてみるか……」

俺は今、手元にあった。どこにでもありそうな普通の剣とガムテープ、あと着ていた衣服類を全て『家庭の物置』の中に放り込んだ。まあ衣服類を放り込むとき素っ裸になったが誰もいないしべつにいだろう。

「能力は大丈夫みたいだな……だったら少し遊んでみるか……」

パチン と俺は指を鳴らすと『家庭の物置』からどこにでもありそうな普通の剣が50本ぐらい出てきて本物のゲート オブ バビロンのように放たれる。

なぜか「雑種が！」って声が聞こえた気がしたがきつと空耳だろう。うん。そうに違いない。

「よし、お遊びはこれくらいにして次いくか……出て来い『ドコモサテライトキャノン』」

そう言うと『家庭の物置』から『ドコモサテライトキャノン』が現れる。俺は現れた『ドコモサテライトキャノン』を『家庭の物

置』から引き抜き、ロケットランチャーを構えるみたいにかまえた。

「大きさはRPG-7くらいか……まあ本物のRPG-7の大きさなんてしらののだが……重さを感じないしエネルギーもチャージされている……ここまでは完璧、あとは威力か……試し撃ちしないとな……」

ここである問題が発生した。設定どおりならオリジナルのサテライトキャノンと同等の威力を持つ『ドコデモサテライトキャノン』。こんなところで撃つたらどうなるかはあきららかである。

となるとどこで……と考えながら空をみあげた。そのとき、俺はひらめいた。

「1回も2回も一緒だよね……」

そうやって俺は『ドコデモA・Tフィールド』の翼を展開して空に飛び立って黒いキノコ雲に向かってとびたつた。

数分後……

俺は最初に落ちてきたところに戻ってきた。ここならずで荒れ果てるし多少地形が変わっても問題はないだろう。さてと……やるか。

俺は『ドコデモサテライトキャノン』を構えて照準を黒煙の根元の辺りにあわせた。

俺は手当たり次第に物を拾ってガムテープを使って練成？した。

数分後……

適当に作っていたら、どこにもありそうな普通の初心者用の杖ができた。ちなみに材料は、木の枝+木の葉で、できた。他にも、石+木のツルでどこにもありそうな普通の鎖鉄球になったり、木の枝+木のツルでどこにもありそうな普通の木製の弓になったり、木のツル+木の葉でどこにもありそうな普通の鞭になったり、石+木の葉でなぜか燃えないゴミになった。

やっぱり物理法則に喧嘩をうっているとかおもえないな……まあどうでもいいが。それにしいも、燃えないゴミか……多分だけど俺の推測では練成？する時の材料がうまく一致しなかったら燃えないゴミになるんじゃないのかな……まあこれだけでは判断材料がすくなすぎるな……

とりあえず燃えないゴミ以外を『家庭の物置』に放り込んで、どこにでもありそうな初心者用の杖を構える。そして……

「プラクテ ビギ・ナル 火よ灯れ」

と唱えた瞬間、どこにでもありそうな初心者用の杖の先端からいき

よいよく火がでた。例えるのなら……ポケ　ンのリザー　ンの火放射の様に。

いきよいよく放たれた火は近くにあった木に直撃して木を一瞬で燃え上がらせた。さらに運悪く周囲の木にも飛び火し、たった数十秒で山火事に発展した。

「うわ……どうしてこうなった。」

俺の周りの木は全て燃えており、かなり温度が上がっていた。

「なんか俺、悪い事したのかな……」

色々やってるじゃないか。by作者

宇宙の意思はだまってる！……とりあえず火が収まるまで空にいるか……

『ドコデモA・Tフィールド』の翼を展開して空に飛び立った。

数時間後……

山火事は予想以上に燃え上がり結局全てを燃やし尽くすまで収まらなかった。まあ、結果として森を焼け野原に変えてしまったのだった。

「はあ……今日はもう色々と疲れたよ……どっか眠れそうな所を探して寝よ。」

しかし、この辺りに村や町は無く、結局俺は近くにあった洞窟で寝ることにした。

ちなみに予断だが焼け野原で拾った炭を手持ちの物全てと練成？したところ、石＋炭でダイヤモンドができた。他は全て燃えないゴミになった。

もうつつこんだら負けだよね……

こうして俺の新しい人生の初日は幕をとじた。

- ? 1 木の枝 + 石 = どこにでもありそうな普通の剣
- ? 2 木の枝 + 木の葉 = どこにでもありそうな普通の初心者用の杖
- ? 3 石 + 木のツル = どこにでもありそうな普通の鎖鉄球
- ? 4 木の枝 + 木のツル = どこにでもありそうな普通の木製の弓
- ? 5 石 + 炭 = ダイヤモンド

以上

追伸 練成?するときの組み合わせが一致しないとほとんどが燃えないゴミになる。

第1話（後書き）

リベリオン「どうもこんにちわりベリオンです。」

リベリオン「えっと……本来ならここに晁もいるのですが、現在不貞寝中なのでいません。なので今回は俺一人で進めて行きます。」

リベリオン「では最初に…… ゆや様、 タケ様、 感想をありがとうございます。これからよろしくおねがいます。」

リベリオン「あとは特にないのでこれで失礼します。できたら感想をおまちしております。」

リベリオン「では、このような駄文にお付き合いいただきありがとうございます。うございます。でま次回でお会いいたしましょう……では、サラバ」

第2話（前書き）

久しぶりの投稿は学校から……

第2話

どうも洞窟で眠ったせいで寝違えて首が痛い 廠島 晃 です。

いや〜昨日は波乱万丈な1日だったな・・・森を爆破したり、世界最高の谷を作っ

たり、森を燃やしつくしたり……うん？自然破壊だつて？H A H A
H A H A ナン
ノコトデスカ？

とりあえず過去の事はおいとして、今はこの後どうするか考えよう。

今のところ能力の確認はすんだし……次は食糧探しか……って飯の事を考えたら

おなかすいてきたぞ……

よし次のミッションは食糧の調達だ！やれるなスネーク！

問題ないぞ大佐！

……… やってて虚しくなってきた………

と、兎に角食糧を調達するか……

俺は一晚お世話になった洞窟に火炎放射（やっぱり成功しなかった。）を放ち俺が

いた痕跡を消して翼を展開して大空に飛び立った。

たつ鳥あとを濁さずってね。………へ？それは違うと思うって？そんなバカな！

！

数時間後……

俺は今、ヘラス帝国領土の国境付近を飛行している。
なぜそんな事がわかるかとゆくと先程、ヘラス帝国の国境警備隊らしき人達がい
たのだ。

まあ彼等に色々話を聞こうと思ったがやめておいた。なぜか話かけ
たらヤバいこ
とになりそうだと俺の直感が告げていた。

実際、彼等、ヘラス帝国国境警備隊は度重なる隣国の部隊との戦闘
でかなりピリ
ピリした状態だったのはまた別の話……

ピコーン 晃は危機察知能力Dを獲得した。

ん？！今、何か手に入れたような気が……まあ別にいいか……と
りあえず村か
町を探して食糧を『家庭の物置』に入れば問題ないわけだしまず
は人里を探し
ますか。

そして、俺が小さな集落を見つけたのは数時間後だった。

俺は見つけた村にたどりついたがなぜか盗賊に襲われていた。

はああ……だりい……とゆうか腹へった。とりあえず今、考えた満腹プランを実行するか。

ちなみに満腹プランとは俺が満腹になる素晴らしい計画だ！

まず最初は村を襲っている盗賊を消す。

次に村人に接触、村を救った英雄として迎えられる。

食糧をもらう、俺、満足！

完璧だ！完璧すぎる！よしヤルぞ！

俺は村人を救うため村に降り立った。

村人視点……

今日はいい天気だった。私はいつもどおりに起きていつもどおりに朝食を作って

食べた。でもいつもどおりなのはここまでだった。

朝食のあとかたづけを終えた時、外が騒がしくなった。

私は外にでて騒ぎの元を確かめるために外に出た。

外に出た私の目に映ったのは村を襲っていた盗賊だった。

盗賊は私を見つけ襲ってきた。私は必死に逃げた。しかし、私は捕まってしまった

村の中心の広場に連れていかれた。

広場にはこの村に住む全員がいた。小さい村のため村人全員と面識

がある。その
ためこの場に村人全員がいるのがわかった。

盗賊達は何か話しているが距離が離れているため聞こえない。

私はどうなるのだろうか……辱めをつけて殺されるのだろうか……それならいっそ
舌を嚙んで死んだ方がいい……

私が自殺を検討している間に盗賊達は話が終わったのかこちらにやってくる。そ

の盗賊達をみて私は自殺する決意がつき、私わ舌を嚙もつとした。だが私が舌を

嚙もつとした瞬間爆発が起き、辺りは光に包まれました。そして、次の瞬間私が

見たものは赤い紋様のような翼を広げた少年でした。そう、それはまるで昔話に出てきた天使のような……

村人視点アウト……

晃視点……

俺は村の中央にある開けた場所に降り立った。ちょうど盗賊が村人にちかずにいたからA・Tフィールドを限界まで圧縮したものを盗賊に投げつけて解放した。

こゝこれは！まさしくエ アに出てくる使徒のアレ！やべーテンシ
ヨン上がるー

よし、もう一発かますか？

ふー……圧縮！圧縮！圧縮！A・Tフィールドを圧縮！そして、
解放！

> i 3 6 6 0 2 — 4 5 8 6 <

やべー！最高にハイな気分だぜ！

ヒヤハーーもう一発かますZE

> i 3 6 6 0 2 — 4 5 8 6 <

あと数回 コレがループします。

俺が満足したときには盗賊はいなくなっていた。

いやー満足したーまあ村を破壊しないように調整はしたけどアレは
マジ楽しい。

と、俺が満足感にひたっていると村人が話かけてきた。

第2話（後書き）

途中でできりました。

第3話（前書き）

今回は知り合いの家からの投稿……早くPC治らないかな……

第3話

話かけてきた村人によると、村人を助けてくれてありがとうございます。しかし

、我々にはなんのおもてなしは出来ません。らしい、どうやら村人の食糧は盗賊に荒らされてのほとんど残ってないらしい……

俺の計画が、なんでこんなことに……

とりあえずどうにかして食糧を奪わないと……そうだ！彼等に心温まる話を聞かせ感動させよう！そして、食糧をわけてもらおう！よし！ではさっそく……

数分後……

「ゴメンナサイ。生きていてゴメンナサイ。ゴメンナサイ。生きていてゴメンナ

サイ。……（以下 ループ）」

「なんでこうなった……」

やべー全員目が虚ろだ。しかも同じこと言ってるし。しかもなんかハモってるし

……正直すげー怖い。とりあえず食糧もらえるか聞いて見るか……

「あの……食糧もらっていいですか？」

俺が一番近くで土下座している村人にきいてみた。

「どうぞすきなだけ持って行ってください。本当にゴメンナサイ。生きていてゴ」

メンナサイ。息をしてゴメンナサイ。存在してゴメンナサイ。」

なんかひどくなっているな……まあ食糧をもらえるなら別にいいが……

俺は村の中央で土下座している村人達を無視して食糧を探し始めた。

数時間後……

俺は食糧を探し回っていると一つの建物を見つけた。中をみてみるとそこにはマ

ジックアイテムと食糧それと武器があった。どうやらこの建物はこの村の倉のよ
うなものなのだろう。

とりあえずここにあるものは全部『家庭の物置』の中にほづりこん

で……まだお

尋ね者にはなりたくないから『家庭の物置』から取り出す。

いや〜やっぱ複製能力をいれといてよかった〜

などと考えているとちよつとミスた。

『家庭の物置』から出したものがいつのまにか元々の五倍ぐらいになつていた。

あ、やつちまつたか…まあ気にしないがな。俺にとってはどうでもいいし〜だいたいいちいち『家庭の物置』に戻すのも面倒いしな。

とりあえず食糧も手に入つたし、マジックアイテムも手に入れた。あともう少しだけ村を探索しておくか……

そう思い俺は倉をでて再び村を探索し始めた。

そして、村の中央に戻ってきた。

ここで一言言わせてもらいたい。俺は別に村人がどうなるうと知つたことじゃない。それはもう会わないと思つたからだ。たがなぜかまた出会つてしまった。なぜだ！

お前が村人が中央にいるのを忘れてただけだろby宇宙の意識（作

者)

はい。そのとうりです。村を探索中にわすれてしまっていました。……ってな
んだ！今の電波は！

気にするなb y宇宙の意識(作者)

貴様は黙っているーってなんか村人達がなんか首に縄を巻き付けてるやつ

が……ってなんで自殺しようとしてるんですか！
俺は一部で自殺を始めた村人を止めて思った。

どうしてこいなった。Orz

と、とりあえずこいつらをもとに戻す方法を考えるか。

！
……………そうだ

いつかの自称幼女神様にやったのと同じ方法をためすか。

よし、ではさっそく……

「えーとー皆さんー俺が指を鳴らしたらあなた達は正気に戻ります。
いきますよ

ー

「……………ゴメンナサイ。生きていてゴメンナサイ。息をしてゴ
メンナサイ。

存在してゴメンナサイ。死んでなくてゴメンナサイ。ゴメンナサイ。

ゴメンッパ

チン（指を鳴らした音）「……………ハ！」「……………」（村人全員）

バタバタバタバタバタバタバ（省略）バタバタ

うお！なんか村人が一斉に気絶して倒れた！怖え

とりあえずあの力オスがなくなったのはよかった。あとは放置してももんだいな

いだろう。とゆうか腹へった。いろいろあったせいで結局何も食べてないし……

それにもう夕暮れだし……とりあえずこの村を出るか……もうこれ以上この村に

はかかわりたくない。

俺はA・Tフィールドの翼を展開して村からど飛び立った。

しかし、このあたりに別の村や町はなくおまけに雨も振り出したので近くにあつ

た洞窟で夜を過ごす事になるがそれはまた別のお話……………

ちなみに余談ではあるが彼が食事にありつけたのは村を出てから3時間後であつ

た。

とある報告書……………

月 日

ヘラス帝国の国境の近くにある集落が盗賊に襲われる事件があった。
我々、第1

856国境警備隊にこの知らせが届いたさい、第32国境警備駐屯
所から出動。
襲われ集落に向かった。

集落に到着した我々は集落の中央付近にて気絶している住人を発見
した。住人の
中には死者は出てないが住人全員に軽い記憶の混乱が見受けられた。
盗賊が荒ら
した痕跡があるが盗賊の姿はどこにもなかった。また集落の中央に
巨大なクレー
ターが出来ており高威力の魔法が使われた可能性がある。また住人
のほとんどが
「天使様が助けて下さった。」と言っていることから何者かが盗賊
を排除した可
能性がある。

また集落の倉の中身が増えていくとゆう謎の現象が起きたが理由は不明。

住人達は「天使様が与えてくださった。」と言っているが本当かは不明

以上が今回の事件の報告書となる。

第1856国境警備隊 隊長 アバン ホース リガルド

この事件をさかいに各地で天使の目撃情報が増えることになるようになる。

第3話（後書き）

感想をお待ちしております。

第4話（前書き）

まさかの連続投稿……

第4話

俺がこの世界に転生して約一年ほどたった。

俺はこの一年でヘラス帝国を端から端まで調べつくした。『家庭の物置』の中身も古今東西あらゆる物が入っているし、マジックアイテムも充実している。能力の使い方にも慣れたし魔法もだいたい380個くらい覚えた。最初魔法が失敗したのは純粹に魔力が多すぎたのが原因だった。一回測ってみたら測定不能だった。今は魔力をコントロールできるようになったから魔法も簡単に使えるようになった。

あとは俺は家を作った。場所はヘラス帝国と原作にはなかったイグナルト王国の間にある巨大な樹海に家を作った。まあほとんど『ガムテープの錬金術師』で錬金？した要塞なんだけどね。ああ、『ガムテープの錬金術師』で思い出したけど色々なものを手に入れたから色々錬金？したんだよね。まあめちゃくちゃなものばかりできたけどね！まあそれはおいおい見せるとして…………

最近ある噂を耳にした。なんでも天使なる存在がいるらしい。

なんでも、盗賊に教われた村を助けてしかもタダで食糧や物質をわけてくれるらしい。

曰く、盗賊に襲われていた旅人をたすけるらしい。
曰く、無料で龍を討伐してくれるらしい。

うん。すげー善人だな。俺には真似できねえよw

ちなみ最初に見つけた村の盗賊を始末したあと色々面倒に巻き込まれた。

道を歩いていたら盗賊に襲われたのでA・Tフィールドの応用で出したA・Tフィールドで盗賊達の首から下と上を永遠に離婚させた。このA・Tフィールドは切れ味は中の上でいどなのだが長くなったり短くなったりするので使い勝手がいい武器の一つだ。

そして、盗賊に襲われてから半年ぐらいたったある日いつものように野宿していたら龍に襲われた。ざっと60体ぐらいだったと思う。まあそんなに強くなかったのでもいい運動になった。

まああとは特に何もなかったと思う……………うん。何もなければだ。

さて、今後の予定なのだが……………

まずあと10年以内に魔法をすべて覚える。そして、オリジナル魔法の開発。
ぐらいしかぶっちゃけやることがない。

やっぱり1000年前はやりすぎたかな………いつそのこと火星一週マラソンで
もやるか………めんどいな。

まああと400年もたてばエヴァが生まれるしそれまで適当に時間を潰すか………

…

ん？誰かが森に入ったみたいだな………ハア………今日は家でのんびりする予定

だったのに………とりあえず認識阻害魔法と迷いの霧（迷いの霧とは結界をはりその

結界に入った者を道に迷わせる魔法である）と迷宮魔法（迷宮魔法とは結界内を迷

宮にする魔法）あと帰れずの魔法（帰れずの魔法とは一度結界内に入ると定められ

た出口からしか出れなくなる）も貼りますか。全部4重に………

俺は呪文を無詠唱で唱え家の周囲に張り巡らす。

これで大丈夫だ。さて、だらだらとすごしますか。

数時間………

ん？もう夕暮れか…さて今晚のおかずはなにかな……

突然だが言い忘れていたがある。この家はデカイ。とてもデカイ、とりあえず某

借金執事か仕えてるお嬢様が住んでたお屋敷よりはデカイ。

まあとりあえずデカイのだが住んでいるのは俺だけとゆう虚しさ…

…なのでメイ

ドさんを2人ほど作った。

茶々丸と同じガイノイドである。

作成はガムテープの『錬金術師』で作った。ちなみに構成材料はGNドライブ(魔力生成可能) + ダークマター + オリハルコン + 死体(少女) + 魂を

物質したモノ(記

録削除済) + 召喚獣マテリアル(バハムート全種類) || 超万能ガイノイド

となっている。

ちなみに何か色々なモノが入っているがほとんどが『ガムテープの錬金術師』で

作成した。ちなみに超万能ガイノイドとそれを作成するパーツにはいくつかの生体

パーツが使われているため『家庭の物置』に入れる事ができないので数も2体し

か作れないのである。

とりあえず2人にはこの家でメイドをやってもらっている。まあ家事全般は全て

やってもらっているから俺はただただできるんだけどね。

まあそんなわけで今日の夕食も彼女達がつってくれているわけだ……

「晃さんー食事の用意が出来ましたので食堂まできてくださいー」

……ナイスタイミングだな。さて、待たせると色々怖いし今回はここまでにし

ますか。

今回の錬成リスト

No1 GNDライブ（魔力生成可能）+ダークマター+オリハルコン+死体（少女）
+魂を物質したモノ（記録削除済）+召喚獣マテリアル（バハムト全種類）≡超万能力ノイド

No2 ??????（*1）+魔法石（青）≡GNDライブ（魔力生成可能）

NO 3 ????? (* 1) + 王家の魔力がこもったナニか Ⅱ ダー
クマター

NO 4 生きた人間 + 非人道的なナニか + ##### (* 3)
+ ????? (* 1)
+ 某聖杯 Ⅱ 魂を物質モノ

NO 5 ##### (* 3) + (* 2) + 鳥? + 非人道
的なナニか + ? ?
? ? (* 1) Ⅱ 召喚獣マテリアル (バハムート全種類)

(* 1) ? ? ? ? は存在がよくわからない物。

(* 2) は放送禁止用語のような物。

(* 3) ##### は「お前の血は何色だー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！
と叫びたくな
るような物。

第4話（後書き）

ここでオリキャラを出しました。一応、ヒロイン予定。

でもまだ名前が決まっていなかったりするのですよ。

なのでこのガイノイド名前を募集したいです。

一応の設定は

性別は女性で双子となります。

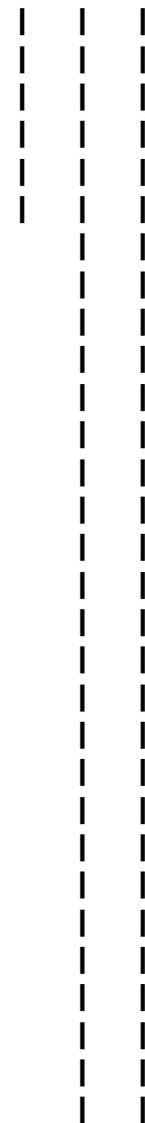
まあ今のところこれぐらいしか考えてないのですが……

とりあえず何かあれば感想のほうによろしくお願いします。

オリキャラの紹介（前書き）

オリキャラの挿絵のみになると思いますが投稿します。

名前が決まったら細かい設定を書いていきます。



オリキャラの紹介（後書き）

名前よろしくお願ひします

第5話（前書き）

最近テストが終わったので投稿……………

晃「お前はテスト中に書いてたよな？」

気にしない〜気にしない〜

第5話

「全く、いきなりあの結界はひどいんじゃないかな。」

「えっと……お前誰だよ。」

どうも 蔵島 晃 です。俺は今、家の前でいきなり現れた男とにらみあっていた。

どうしてこうなった……

今日は久しぶりに外に出ようと思った。 家を出た。 ちよう

ど家の扉をノックしようとした男と対面 　　そしていきなり

「全く、いきなりあの結界はひどいんじゃないかな。」だ。

とまあ、こんなわけなのだが……とりあえず誰よコイツ……

「そうだ、まだ自己紹介してなかったね。ボクはフェイト・アーウエルンクス よろしく」

「あ、ああ蔵島 晃だ。とりあえず歓迎はしないからお茶のんで帰れ。」

「全くなかなかひどいんじゃないか……しかし、あの有名な天使の名前を覚えてもらえるとは、光栄だね」

ん？天使？誰が？オレ？

「ちょっとまってフェイト・なんたら」

「フェイトでいいよ」

「それじゃあフェイト、お前の言っている天使って誰のことだ？」

「君のことだろ」

..... なんです

つと、某英霊の口癖を言っている場合じゃないな。

「よし、フェイト、とりあえず歓迎もしないしさっさと帰って欲しいんだが仕方なく家に招いてやるからその話を詳しく聞かせてもらうぞ。ああ、ちなみに否定権はないからな。」

「やれやれ…君は噂とはまるで違うね。」

「うるせえ……で入るの入らないの？」

「上がらせてもらおうよ」

とりあえずフェイト家に招いて応接室までつれてきた。

「なかなかいい屋敷だね」

「そりゃどうも、とりあえず適当に座ってくれ。」

「ああ」

フェイトは応接室に備え付けられたソファ―に腰を下ろした。

「紅茶とコーヒーあとカタストロフヒーがあるけどどれにする？」

「なんだい最後のは……」

「飲んだらカタストロフした感覚を味わえるモノだ」

「コーヒーで……」

ちつと俺は心で舌打ちをしながら応接室に備え付けてあるインスタントコーヒーの袋を二つとった。

「インスタントなのかい？」

フェイトはなにか残念そうな声で問い掛けてきたが……

「それはこれを飲んでから言ってみろ。」

そういいながら俺はフェイトの前のテーブルにコーヒーを置いた。

「それじゃあいただくよ……こゝこれは……」

フェイトはコーヒーを少し飲んで驚愕の表情をあらわした。

まあミリ単位の変化だったが。あれは心の中で「バ、バカな」って驚いているな……

まああのインスタントコーヒーは超極上の豆の超極上な部分だけを使いそれをA・Tフィールドで圧縮し、それを特殊な乾燥方法で乾燥させたものだからね。

まあ制作費だけで一袋だけで800万はかかるだろう。
まあ『家庭の物置』で無限に複製してるから実際10円ぐらいしか
かからないのだ。

ん？説明している間にフェイトが呪文を唱えてるな。あの呪文は…

…

「解析はできないぞ」

「ちっ」

うわコイツ舌打ちした！

ん？そういえばフェイトってどっかで聞いたことがあるような……
…あ！ネギま！の原作に出てきたフェイトじゃん！なんかでっかく
なってるからきずかなかった！

「うん？どうかしたのかい？」

「いや、少し驚いただけだ。」

とりあえずコイツが完全なる世界の構成員ってのはわかった。ここ
にきたのも完全なる世界がらみだろうし……

まあどうでもいいがな！

今は俺の天使疑惑の話の方が重要だ。

「さて……そろそろ天使について話してもらおうか……」

「その前に聞いていいかい？」

「なんだ？」

「できたらこのインスタントコーヒーを売ってくれないかい？」

「……………こいつ本当にコーヒー好きだな……………」

「それなら後でいくらでも売ってやるから今は天使について話せ。」

「わかったよ……………まず僕はある組織に所属している「完全なる世界か」っ！まさか天使には神通力があるのかい？まあ知っているなら話が早いね。僕は君をスカウトしに来たんだよ天使」

「なあフェイト」

「なんだい？」

「お前のその厨二病しまみだ組織についてはどうでもいい。俺が知りたいのはなぜお前が俺を天使と呼ぶのかだ。」

「厨二病って、なかなかひどいんじゃないか……………」

「そんなのは知らん。さっさと話せ。」

はあ…………と溜息をもらしたフェイトは語りだした。 驚愕の真実を

…………

つづく…………

ifシーン

フェイトがカタストロフヒーを飲んだら………

俺はフェイの前のテーブルにカタストロフヒーを置いた。

カタストロフヒーはコーヒーとにているため飲むまではわからない。

そして、フェイトはカタストロフヒーを口にふくんだ。

そして、フェイトは固まった。

そして、フェイトはティーカップを落とした。

カップは重力により床に叩きつけられた。

カップは砕け中のカタストロフヒーが床を汚した。

そして床をよごしたカタストロフヒーからブクブクと泡と悪臭がでている。

フェイトはカップを持っていた状態のまま固まってビクビク震えていた。

数秒後……

フェイトがいきなり立ち上がった。そして、ぶっ倒れた。

床をゴロゴロと転がり回るフェイト。その顔はひどかった。

目の瞳孔はひらききって波をながしてる。

口は舌をだらしなく出して、唾液があふれて、口は空気をもとめパクパクしてる。そして……

「グゲツブガツガバツ！」
と言っている。

そして、いきなり、止まったと思うとブリッジをしてピクピクと震えそして倒れた。

とうめからみてもわかる。あれは逝ったな……

とりあえず顔をグシャグシャにして逝ったフェイトを処分するため電話の内線で連絡をとった。

フ
イ
ト
E
N
D

第5話（後書き）

二つに分けました。

晃「それに何か意味があるのか？」

特に何も無い！

第6話（前書き）

連続投稿！

晃「連続投稿なら分ける必要ないだろ」

気にしない」

第6話

とりあえずフェイトの話を要約するところだ。

俺がこの世界に来て、いろいろやったわけなのだが、なぜかほとんどの行動が民衆の支持をえているのだ。

そして、誰が言ったか知らないがいつの間にか天使として崇められるようになったらしい。

フェイト曰く最近は大規模だが天使を崇めて信仰する連中がいるらしい……………

しかし、俺が天使ね……………結構黒いことも堂々とやってたんだけどな……………

まあ夢は人それぞれだからね。夢を見たい連中には勝手に見てるといいぞ。

「さてと……………君の質問に答えたんだから次はこっちの要件をすませてもらおうよ」

「ん？なんだ？コーヒーのことか？」

「完全なる世界のことだよ。……………まあコーヒーのことも大切だけどね」

コイツは……………原作とまったく違うな……………

「でなにをする組織なんだ？」

多分世界を終わらせて新しい世界を作ろって考えてる組織だったと思うんだが……

「まあ、簡単に言つとこの世界はある人が作つ「ライフメーカー」か君は……まあそこまで知っているなら話が早いね。ようは影からこの世界をよくして行こうってゆう組織さ。」

あれ？こんな組織だっけ？なんか原作と違うような……

「そうか……ところでなんで俺を？」

「ライフメーカーがスカウトしてこいつってうるさくてね……実はライフメーカーは最近引きこもり気味でね。」

「なに？」

「一年ぐらい前から出始めたある小説にご執心でね。……最近はずっかり引きこもりってしまつたよ。」

「それでなんで俺をスカウトする話になつたんだ？」

「実は僕の最初の任務はある小説の作者を探すことだつたんだよ。それで色々調べていると、その作者と君が同一人物だとわかつたんだよ。」

ああ、そうゆえばこの世界に来てからすぐのころはそんなことをやつたな……内容は前世のパクリだけだね。

「それで僕は君をスカウトにきたんだよ。まあまさかあんな結界をはられるとは夢にもおもわなかったけどね。」

ん？結界？

「なあフェイト？結界ってなんのことだ？」

「君は……僕がこの森に入ってきたときかなり悪質な結界を張り巡らしただろ？」

ああ、たしか1ヶ月前に………って！

「お前！1ヶ月間であの結界を抜けてきたのか！普通は一度入ったら3年は抜けられないような代物だぞ！」

「ああ、あの結界はひどかったよ………」

なんとも言えない沈黙がみように息苦しかった。

「その……悪かったな。」

「いや別にいいよ。」

つと話がだいぶづれてるな。

「とりあえずお前の事情はわかった。確かに完全なる世界には興味がある」

「それじゃあ入って「だが断る！」………」

いや〜一度言ってみたかったんだよね〜まあフェイトはなんか疲れた顔してるけど無視だ。

「まあ入らないでもいいからライフメーカーには一度会いにきてくれないか？」

「わかった。じゃあこれを渡しておく」

そう言っただけ俺は『家庭の物置』から通信よつの護符をとりだす。

「これは？」

「通信用の護符さ。お前には受信よつのほつを渡しておくよ」

「わかったよ」

そう言っただけフェイトは護符を受けとつ。

フェイトは何も言わずにに書いて紙を渡してくる。

「じゃあここに送るから」

「よろしく頼むよ。あと代金だが……」

「それなら配達した時につけとる」

「わかったよ。……さて、そろそろ帰らしてもらおうよ」

そう言っただけフェイトは立ち上がった。

「そうか……なら森の外まで送ってやるわ」

「じゃあお願いできるかい」

俺は無詠唱で転送魔法を発動させる。そして、フェイトの前に青く光るドアを作り出す。

「そのドアの向こうは森の外だ。」

「わかったよ。それじゃ連絡を待っているよ」

そう言ってフェイトはドアの中に消えてドアも消えさった。

さて……とりあえずコーヒーを用意するか……といっても『家庭の物置』から出すだけだな。

配達は彼女達のどちらかにやってもらおうか……

しかし、俺が天使ね……全く嬉しくない称号だな……いつそのこと近くの国を潰してみるか？……めんどいな。

まあ今日はもう何もやる気が起きないしだらだらして過ごすか……

第6話（後書き）

感想をお待ちしております。

あと双子の名前もお待ちしております。

第7話（前書き）

PSPでの投稿とゆう愚考に挑戦！

ただPSPだと入力字数の限界がありました。Orz

なので後書きに本文の続きを書きます。

PCが直り次第修正するのでご容赦ください。

あと感想をお待ちしております。

あと今回は短いです。

第7話

フェイトが俺を訪ねてきて一ヶ月がたった。

とりあえずこの一ヶ月、俺はフェイトに頼まれたコーヒーを彼女達に届けてもらい俺は家の中である作業をしていたらいつの間にか一ヶ月がたっていた。

とりあえず俺は久しぶりに外に出ようと思った。その時……

「ん？森に誰か入った？この方角はイグナルト王国の方が……しかも多いな……100？……いや200か……」

とりあえずこの前から張り巡らした結界があるからこの家まではたどりつけないだろうがこのまま放置とはいかないな……

俺は近くの電話をとり、内線を繋いだ。

「ああ、俺だが森に何か入り込んだみたいなんだが……」

「はい。こちらでも確認しました。進入者はイグナルト王国所属の魔法騎士団のようです。」

「やはりか……奴等の目的はわかるか？」

「3秒お待ちください……イグナルト王国のサーバーにハッキングした結果、進入者の目的が判明しました。」

「報告しろ。」

「了解しました。どうやらイグナルト王国現国王の勅命で動いているようです。」

「命令内容は？」

「天使との接触、イグナルト王国に利益ある存在なら保護せよ。害ある存在なら始末せよ………」と」

第7話（後書き）

「ほう……なら容赦する必要はないな」

「ええ、そうなりますね。」

「よしならば戦争だ。」

「了解しました。私達はどうしましょうか？」

「お前達はイグナルト王国の情報を集めておいてくれ。」

「了解しました。晁様はどういたしますか？」

「進入者に接触してくる。一応正当防衛にしたいからな」

「晁様の場合過剰防衛になるでしょうね。」

「お前……なかなか言うようになったな……さてそろそろ行ってくるよ」

「わかりました。行ってらっしゃいませ」

「ああ」

そう言って俺は電話を切った。

さて……ではお客様とちょっとOHANASHIしにいってきますか……

俺は家を出てA・Tフィールドの翼を展開して飛び立った。

第8話（前書き）

今回もPSPからの投稿……

後書きに本文がはみ出してしまいますがご容赦ください

PCが直り次第修正しますのでどうか読みにくいですがお願いします。

あと後書きで報告できないので先に報告させていただきます。

まずヒロイン予定の双子のガイノイドの名前が決定しました。

姉は理沙^{リサ} 妹を沙良^{サラ}にしました。

アイデアを送っていただいた タケ様 ジークフルード様 零崎
黒識様 バリアント様 ご協力ありがとうございました。

検討した結果、零崎 黒識様とバリアント様のアイデアを採用する
事になりました。

姉妹のプロフィールは後日追加させていただきます。

以上が報告となります。

長々とすみませんでは今回も短いですが本編をどうぞ……

第8話

イグナルト王国から進軍してきた魔法騎士団は結果だけゆうと壊滅した。

詳しく説明すると……

俺はまず進入してきた魔法騎士団に接触した。

俺は友好的に話そうとしたが奴等は「我々の配下になれ！さもないとお前を排除する！」の一点張り……

そして、話し合いは平行線のまま時間はすぎて行き、ついにイグナルト王国の魔法騎士団がしびれを切られて攻撃魔法を放った。

ちなみに今までの話し合いの内容はすべて録画している。これで正当防衛は実証される。

さて……ここでいったん録画を止めて……さて殺るか

俺は『家庭の物置』から特殊な魔法をかけた刀を2本とりだし魔法騎士団に突っ込んだ。

とりあえず簡単には殺さず両手両足を切り落としダルマを大量生産していく。

刀にかけた特殊な魔法の効果により命が奪えないためダルマになっ

てもただ苦痛を上げることしかできなくなる魔法騎士団員達…

逃げようとするが結界にはいったため逃げることはできずにまた一人、また一人、ダルマになってゆく。

なんとか魔法を放ち攻撃する魔法騎士もいたがすべてA・Tフィールドにはじかれる。

魔法騎士団はなすすべもなくだるまにされていった。

第8話（後書き）

こうして魔法騎士団は壊滅しダルマとなった。

さて……遊びでダルマにしてみたけどこのダルマの処分どうしよう

……そうだ！

俺は名案を思いつきダルマ達を一カ所に集めてその下に魔法陣を描いた。

さてと、これで準備完了とぎつと200ぐらいあるし少しぐらいのやつならできるだろ。

そう思いながら俺は魔法陣を起動させた。

ダルマ達の悲鳴をBGMに俺は今後の事を考えた。

とりあえずさつき録画した映像とイグナルト王国の命令の詳細をネットに流してみるか……あとは相手の出方次第だな。理沙と沙良も情報を集めてるだろうし……とりあえずライフメーカーと会うのはこのゴタゴタがかたずいてからだな。

俺が一応の結論をだすとBGMがなくなってる事にきずいた。

魔法陣の中心には赤い小さな石がういている。

はあ……賢者の石は生体部品だから複製できないんだよね、『ガムテープの錬金術師』でも作り方がわかんないし……しかも結構消費するからストックの数もあんまないし……

そんなことを思いながら石を回収して俺は家へ帰るため転送呪文を唱えたのだった。

余談だが残ったダルマ達の残骸は森に住む魔獣たちが残さずいたばかりでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5617y/>

もし外道なチートオリ主が物語りに介入したら.....ネギま!編

2011年12月19日01時47分発行